

## 笑顔のゆくえ

小 六

ぼくの兄は、高校一年生です。生まれつきダウンしょうという障がいがあります。ダウンしょうは、個人差がありますが、健常の人より成長速度がおそいという特ちょうがあります。兄はあまりしゃべることができないので、コミュニケーションが苦手です。小さいころは、心臓や腸の手術を何回もして、今でも体にあとが残っています。ぼくは、家族と一緒に、小学校低学年のころから、兄の手伝いをしています。

でも、ぼくは、高学年になるにつれて、兄の手伝いがだんだんつらく、めんどろに感じるようになってきました。特に、

毎日一緒に入るお風呂がしんどくなってきたいました。なぜかという、兄は体を自分で洗えなかったり、シャワーの温度を勝手に低くしたりと、いろいろ大変なことが多いからです。自分のことをやった上に、兄の手伝いをするのがいやになっていきましたが、母は仕事でおそく、同居の祖父母は高れいで誰もできる人がいないので、仕方なく毎日手伝いをしていました。

そして、ある日、その気持ちが悪く発してしまいました。いつものように二人でお風呂に入って体を洗っていたとき、不意にいらついで、「体くらい、自分で洗えよ。」と言ってしまった。ぼくのおこった声に、兄はおどろき、それから悲しそうに顔になりました。

その夜、ぼくはふとんの中で、「あんなことを言っただけよかったのかな。」「しようがないじゃん、ダウンしようなんでもん。」など、思いがごちゃまぜになっただけで、思いつけませんでした。そして、「お兄ちゃんがダウンしようじゃなければ……。」とまで考えてしまいました。

次の朝、気まずくて兄の顔をあまり見ずに登校しました。昨夜のことを思い出した時に、兄の悲しそうな顔がうかんできて、なぜあんなことを言ってしまったんだろうと、後かきの気持ちが強くなりました。兄を傷つけてしまったことが、ぼくの心を重くしていました。

兄は明るい笑顔とやさしい性格で、みんなに好かれています。ダウンしようで大変なこと多いですが、ぼくの大切な家族です。ぼくが悲しいときやつらいと

き、兄の笑顔でなぐさめられたことが何度もあります。「お兄ちゃんに謝ろう。」と、ぼくは決心しました。

夕方、いつものようにお風呂に入ったとき、思いきって言いました。

「ごめんね。昨夜はあんなこと言っちゃって。」

すると、兄は、「いいよ。」と言うように、にこっと笑顔を見せてくれました。ぼくの心も、ふわっと明るくなりました。

母にその話をする時、

「お兄ちゃんはダウンしようで障がいがあるけれど、ゆつくりと成長しているんだよ。少しずつだけど自分でできることが増えてきているし、言葉も増えているでしょ。」

ぼくは、母の言葉を聞いて、はっとしました。

「全部をやってあげるのではなくて、まずはお兄ちゃんにやらせてみて、見守ってあげることでも大事だよ。○○ちゃん、いつもお兄ちゃんの手伝いをしてくれてありがとうね。でもつらくなったら、ママに言ってね。ママは○○ちゃんも笑顔でいてほしいと思うよ。」

母にありがとうと言われて、ぼくはなみだが出てきました。そして、兄にはいつも笑顔でいてほしいと強く思いました。そのためには、「ぼくも笑顔でいなければ。」と思います。

今でも、兄の手伝いは大変ですが、無理せずできるはんいで手伝い、前向きに明るく楽しく過ごしていきたいと考えられています。家族みんなが笑顔で過ごせるように。